

氏 名 (本籍) ^{つかもと}塚本 ^{ま ち}真知 (岡山県)

学 位 の 種 類 博士 (医学)

学位授与番号 甲 第 647 号

学位授与日付 平成 29 年 3 月 17 日

学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当

学位論文題目 **Number of Gastrointestinal Symptoms is a Useful Means of Identifying Patients with Cancer for Dysphagia**

審 査 委 員 教授 塩谷 昭子 教授 高尾 俊弘 教授 中塚 秀輝

論文の内容の要旨・論文審査の結果の報告

本論文は、嚥下困難感を訴える患者を対象に、癌患者の割合および癌と関連する臨床背景因子について検討した論文である。当大学附属病院消化器センターの消化管内科外来で使用している質問票を用い、嚥下困難感についてしばしばあるいはいつもあると回答した外来患者を対象とし、患者を 4 群 (癌、食道胃逆流症、食道運動障害、その他) に分類した。質問票の結果に加え、年齢・性別・喫煙・飲酒・BMI を検討項目として、癌との関連性を評価した。検討項目が不明であった症例を除外した 5362 例中、嚥下困難を訴えたのは、208 例 (3.9%) であり、上部消化管術後 22 例を除外した 186 例が対象であった。疾患の頻度は癌が 18.3%、食道胃逆流症 12.9%、食道運動障害 11.3% で、癌が最も多かった。癌群とその他群との 2 群比較で、多変量解析の結果、男性と喫煙が棄却され、54 歳以上、体重減少、飲酒、消化器症状の項目が 2 項目以下の 4 因子が癌と有意に関連した。高齢・体重減少・飲酒は、既知の癌関連因子であるが、その他の消化器症状の訴えが少ないことが癌と関連したことが興味深い。嚥下困難感を来す疾患として、咽喉頭・食道癌を主とする器質的疾患の他に、食道アカラシアやその他の機能性疾患や神経疾患、さらに精神疾患などがあげられる。

心因性あるいは機能性疾患を有する患者は、嚥下困難感に加え、種々の消化器症状や不定愁訴を訴えることは日常診療でよく経験する。例えば、非びらん性胃食道逆流症は、胃もたれや胃痛を訴える機能性ディスペプシアおよび便秘・下痢・腹痛を訴える過敏性腸症候群を併発しやすいことも報告されている。従って、消化器症状の項目が少ないことが癌と関連したことは、これまでの報告を支持する結果である。すでに *Dysphagia* (2015 *Impact Factor*: 1.754) に掲載され、学位論文に値すると評価する。

学位審査会（最終試験）の結果の要旨

学位申請者は、論文の内容について、臨床背景・方法・結果を中心に明解および的確に報告できていた。審査委員の質問に対して、論文内容を十分理解した上で、可能な限り明確に回答ができていた。質問票の内容についての質問に対して、質問票が消化器症状に関する 15 項目からなり、既存の臨床研究でよく用いられている 2 つの質問票を組み合わせて改訂したものであるとの回答であった。消化器以外の症状について検討されていないことが、問題点として指摘された。癌の疾患の内訳についての質問に対して、食道癌が主であるとの回答があった。食道癌と以外の癌をまとめて検討していることは問題ではないかとの指摘があったが、論文投稿の際に、査読者からの指摘によりまとめて解析する結果となった経緯の説明が申請者よりあった。すでに他院や他科で癌が診断され紹介された患者を対象に含めているかについての質問について申請者より対象としているとの回答があった。これらの紹介患者を対象者に含めているため、本研究で、嚥下困難感を訴える患者の癌の頻度が 18.3%であったが、実際にはもっと低い可能性について確認がなされた。

本研究の問題点について、対象症例が少なく、消化器疾患に偏った症状のみの検討であり、さらに過去の報告で病脳期間は器質的疾患より機能的疾患で長いことが指摘されているが病脳期間が検討できていないことであることが申請者より説明があり、研究の limitation についても理解できていた。

本研究は、大学病院で行われ、すでに近医で癌が除外されている可能性があり、癌と診断された紹介患者と、多数の基礎疾患あるいは消化器症状を有する患者を対象としているためセレクションバイアスの可能性が十分に考えられ、一般病院やプライマリケアでは、異なる結果が予想される。これらの本研究の問題点についてまたさらなる研究の必要性についても、申請者に確認がなされた。